

古学の可能性を探ることにしたい。

今回のシンポジウムでは、考古学、東洋史から報告がおこなわれるが、考古学からは、古代エジプトにおいて岩窟墓内に残された「自伝」形式の碑文を手がかりにその他の資料も含め、ヒクソスの問題に焦点を当てる。古代エジプトにおいて、ヒクソスはどのように語られてきたのか、また、近年の発掘調査はヒクソスについてどのような新しい知見をもたらしたのか。両者の比較を通じてヒクソスの実像に迫る。一方、東洋史からは、被葬者の生涯を記した墓誌について、その研究の進展に伴い、墓誌そのものがいかなる史料であるかを問い直さなければならなくなった現状を踏まえ、墓誌文化の確立期である唐代の墓誌がその後半から宋代にかけてどのような変化を遂げるのかを視野に入れつつ、墓誌の史料的性格の分析を試みる。

上記の報告をもとに、日本史、西洋史それぞれの視点からのコメントを含め、時間と空間を超えた「書かれた歴史、書かれなかった歴史」に向き合うための活発な議論が期待される。

報告

ヒクソスの虚像と実像

考古学専修 近藤 二郎

「ヒクソス」について私たちが持っているイメージは、前三世紀のプトレマイオス朝時代のエジプトの神官で歴史家であったマネトンがギリシア語で著した『エジプト史』の中の記述が、その根底にあるといっても過言ではあるまい。残念ながら、マネトンの『エジプト史』原本は現存せず、幾つかの写本が断片として残されているだけである。その中で、ローマ時代のユダヤ人歴史家ヨセフスの写本によると次のように記されている。「アジアから異民族が侵入してきて、エジプトを征服したのである。しかもその支配は百年あまりも続いた。こんな事態―異民族によるエジプト支配―は有史以来最初の重大事件であった。」あるいは「不意に東の方から素性いやしい人たちが、われわれを驚かせるようにやってきた。彼らはわが国に遠征するだけのじゅうぶんな大胆さをもっていた。しかもわれわれが思い切った戦いをまじえる前に、力をもってわが国をたやすく占領したのである。」このように、ヒクソスを武力でもってエジプトに侵入し、エジプトの国土を支配することになった異民族の王としている。

こうした「ヒクソス」の支配者が持つ「悪者」としてのイメージ

は、新王国第十九王朝時代の「サリエ・パピルス (Papyrus Sallier)」にも記されている。このパピルスには、「アポピスとセケネンラー」と題する話が書かれており、デルタ地帯の王宮に居たヒクソスの王であるアポピスが、彼に敵対するテーベの第十七王朝の支配者セケネンラーに対して、「テーベのカルナク神殿の池で買われているカバの鳴き声がうるさくて夜に眠ることができないので、なんとかしてもらいたい。」という無理難題を要求している。

このことは、ヒクソスの王が非常に理不尽な要求を掲げた非道な王であることを読む者に強く意識させている。この種の「ヒクソスⅡ悪者」とするイメージは、新王国第十八王朝時代の王のもとで形成されたもので、必ずしも事実を反映しているものではない。下エジプトであるナイル・デルタに本拠を持ちエジプトを支配していたアジア系のヒクソス王朝に対抗して、彼らを国外に放逐することで統一国家である新王国を樹立した第十八王朝の王家は、ヒクソスに対する所謂「ネガティブ・キャンペーン」戦略を実施することで、「ヒクソスⅡ悪」、「第十八王朝Ⅱ善」なる構図を生み出していったものと思われる。

「ヒクソス」に関する文字史料としては、上エジプトのアル・カーブ遺跡にある第十七王朝から第十八王朝時代の人物であるイアフメスの岩窟墓の壁面に記された自伝資料が、第十七王朝末期から第十八王朝初期にかけて実際にテーベ侯のもとで実施された対ヒクソスとの戦闘を記録した同時代史料ともいべきものである。こうした

「自伝史料」は、古代エジプトでは、古王国時代から知られており、個人の業績を誇示したり、王に対する忠誠を強調したものであるため、記述された文字史料は非常に個人的な情報であり、重要な資料ではあるが、ある意味で個別的であり、しばしば全体像を概観するには適していない。また、同じく同時代資料である第十七王朝のカーメス王のステラ (Cairo II/1/35/1~Luxor J.43) にも、第十七王朝末期のカーメス王治世下におけるヒクソスとの戦いの様子が刻されている。しかしながら、このカーメス王のステラは「王碑文」であり、王の絶対性を主張するものであり、王の強さを強調するあまり、史実とは異なった内容が表現される場合がある。このカーメス王のステラにおいても、ヒクソスの東デルタにおける中心拠点アヴァリス (フウト・ウアレト) での戦闘に関する記載はあるが、これまでの研究において、実際に戦闘がおこなわれたことについて疑問視されている。

一方、第十九王朝の王都ペル・ラメセスに建立された「四〇〇年ステラ」は、セト神のデルタ定着四百年の祝祭を記念したものであり、ヒクソスが、パレスティナ地方の神であるバルをエジプトの神であるセトと同一視して手厚く崇拜したことが刻されている。これにより、同じ新王国時代でも第十九王朝のヒクソスに対する評価が第十八王朝のものとは異質であったことを示している。以上見てきたように、文字史料は書き手の立場や身分、碑文の性格等によって内容が大きく異なったものとなることが判明している。

近年になって、東デルタのヒクソスの中心地アヴァリスの遺跡であるテル・アル・ダバアの発掘調査によって、これまでに多くの新事実が判明し、中期青銅器時代のエジプトとシリア・パレスティナを含む東地中海世界の編年や交流の問題について新たな知見が得られた。

またこの地には中王国第十二王朝以降、北シリア方面から大量のアジア系の人々（主として男性）が傭兵として居住していたことも明らかとなっている。今後は、文字史料と考古資料のどちらかひとつに偏重することなく、文字史料と考古資料の双方をもに使用しながら、検討を重ねることが不可欠であると考えられる。

中国・唐代墓誌の史料的性格

教育・総合科学学術院・東洋史学専修 石見 清裕

現在の学界における大方の意見によれば、中国の墓誌の源流は晋代の「墓表」に求められる。それ以前では、墓主を顕彰するものとして「墓碑」が建てられたが、あまりに華美になったために三国・魏で「薄葬令」が發布され、以後もしばしば「禁碑令」が發布された。そこで、誰の墓かを示す小型の石碑（墓表）を作り、目立たぬようにそれを墓室に入れ、やがてそこに墓主の生涯を記すようになり、墓誌につながったとされるのである。北魏の洛陽遷都後の二〇年ほどの間に、墓誌石は正方形が一般的となり、以後この形式が清

朝まで維持された。

唐代の墓誌は、現在公表されているものだけで七千点に近い。未公開墓誌を数えれば、この数値はさらに増加するはずである。ただし、この数値に依拠して、唐代を墓誌文化の最盛期と見てはいけない。唐代の資料といっているので各地の研究所・博物館などが保管・保存するのであり、明清時代のものは多すぎて整理できないだけなのである。

唐代の墓誌は、敦煌・トゥルファン出土の文書とは違って長安・洛陽周辺の内地から多数出土し、しかも在来の編纂史料には見られない情報を提供するので、歴史学研究において今や重要な史料群となった。しかし、本来墓地に埋葬してしまえばそれで事は足りたはずの性格のものであるので、それを歴史学の史料として使用するには、そもそも墓誌とはどのような性格の記録なのかを押さえねばならない。

唐・前半期の墓誌のほとんどは、縦・横の罫線が引かれている。墓誌石の末尾まで文字を埋めずに左部に未刻字のスペースが空いている場合でも、その空白部分にまで罫線は確認される。なかには、罫線の升目を無視して、罫線の上から刻字する墓誌も存在する。逆に、文字が収まりきらず、末尾部分は小字で無理やり詰めて刻す例も見られる。これらから判断すれば、墓誌とは文案ができてその字数にあわせて罫線を引くのではなく、あらかじめ罫線升目の施されたいわば原稿用紙があって、それに文章を刻して作成されたものと考え